

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 6 日現在

機関番号：14301

研究種目：基礎研究 (C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20530569

研究課題名 (和文) 心理臨床場面における対話の構造

研究課題名 (英文) Structure of Dialog in Psychological Counseling

研究代表者

桑原知子 (KUWABARA TOMOKO)

京都大学・教育学研究科・教授

研究者番号：20205272

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：臨床対話, マクロ的構造, ダイナミクス, 非言語的行動, 定量的分析

1. 研究計画の概要

対話は、言語・非言語行動による二者間のコミュニケーションであり、各自のもつ情報を相手に伝えることや、話題に対する感情や評価を相互に伝え合い共有することに加え、新しい問題解決法を思いつく、新たな自己認識・他者認識に至る、といった創造的・発見的な機能も有している。中でも、心理臨床面接における対話 (以下、臨床対話と記す) は、自己認識や他者認識、問題解決法の発見等の機能を十全に発揮している例であり、大きな社会的影響を持つ重要かつ貴重な研究対象といえる。本研究は、社会心理学と臨床心理学および認知心理学のアプローチの融合によって、臨床対話の構造、およびそのダイナミクスを実証的に明らかにすることを目的とする。

本研究は、日常の対話と臨床対話との比較に主眼を置く。臨床対話が、日常の対話との比較においていかなる特徴を持ち、どのような社会的影響が作用しているかを、実証的検討によって明らかにすることを目的とする。このため本研究では (1)臨床対話のマクロ的時系列構造、(2)ミクロレベルの情報処理のダイナミクス、の2つの観点から検証を行う。

2. 研究の進捗状況

初年度から2年度目までは、上記2つの観点について、次のような検討を行った。

(1)臨床対話のマクロ的時系列構造

臨床対話の構造における、①熟達度による相違、②カウンセラー・非カウンセラーの相違に関する検討を行った。初回面接のロールプレイ (通常心理臨床面接と同じ50分間。主訴およびクライアントの年齢・家族に関しては統一) という形で行なわれた心理臨床面

接、および非臨床家による一般的な悩み相談の対話等を収録し、身体動作の同調性や瞬きや傾き、ならびに発話形式の分析を行い、それぞれを時間軸に沿って対応づけすることにより、カウンセリング対話のダイナミックな構造を明らかにしてきた。

(2)ミクロレベルの情報処理のダイナミクス

カウンセラーのクライアント理解、すなわち、どのような情報を選択的に拾うか (重要視するか) を調べることを目的とし、心理面接ビデオの視聴後の再生課題を用いて、カウンセラーによるクライアントに関する記憶の仕方について検討した。クライアントが話した内容のうちどの要素を記憶するかという観点で、カウンセラーを非臨床家と比較した結果、カウンセラーと非臨床家の量的・質的相違が示された。

3年度目はこれまでの検討で扱ってきた深層心理学に基づいたカウンセリングに加えて、認知行動療法のカウンセリングを取り上げた。両者は、その人間観や心理療法観においても異なるところが多いためである。両アプローチによるカウンセリング対話における、カウンセラーの視線や発話と沈黙、身体動作を分析した結果、アプローチ間の相違が示された。たとえば、深層心理学的アプローチ事例のカウンセラーは、クライアントを直視している時間が全体の90%を占めるのに対して、認知行動療法のカウンセラーはクライアントを直視する時間よりも記録用紙を見る時間の方が長いことが示された。しかし、カウンセラーの相違的表現を分析した結果、両アプローチの共通性が示された。一般対話の分析結果も踏まえ、学派間の相違と共通性について考察した。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

1. 研究の進展, 2. 研究成果の発表, いずれにおいてもおおむね順調に進展している。

4. 今後の研究の推進方策

これまでの知見も踏まえながら, 本年度は, これまで得た非言語的行動の定量的データと, クライアントとカウンセラーの発話や内観との対応をより詳細に検討する。このことにより, 上手な聴き手のもつ特性, ならびに, 話し手のこころの変化のプロセスに関して考察する。検討するためのデータとその取得方法は以下のとおりである。

○面接後のカウンセラーの内言: カウンセラーの心的プロセスに関して予め示唆を得るため, 面接を実施したカウンセラーに面接映像を提示し, 自身の発言の意図やそのときの心理状態を報告させる。

○言語データ: カウンセラーの発話形式の分類, 熟練カウンセラーの心理評定によるクライアントの内省的思考の深まりの定量化を行なう。これにより, カウンセラーの違いによる, カウンセラーおよびクライアントの言語内容の相違を示すとともに, 2者による情報処理に関する検討を行なう。

○非言語データ (音声, 身体動作, 表情, 瞬目, 視線): 発話・沈黙の時間的構造, ピッチ, 発話速度の分析, 身体動作の2者間の同調傾向に関する心理評定およびビデオ解析による検討, ならびに, 表情ならびに視線行動の解析を行なう (分析には, 前述の渡部ほか 2006, 小森・長岡, (2010)を適用する)。これにより, カウンセラーの違いによる, カウンセラーおよびクライアントの行動の特徴を示すとともに, 2者による情報処理に関する検討を行なう。

また, 脳科学や医学といった隣接領域からの批判的見解もふまえ, 臨床の「知」に関わる実証研究の可能性と限界について考察する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 長岡千賀・小森政嗣, 心理面接におけるカウンセラーの応答: 話者交替時のカウンセラーの発話冒頭を指標とした事例研究, 認知科学, 16(1), 24-38, 2009, 査読有

[学会発表] (計10件)

- ① 長岡千賀・桑原知子・吉川左紀子・小森政嗣・渡部幹, 心理面接における話者理解に関する実証的検討(6)―話し手の視

線時間を指標として―, 日本心理学会, 2010年9月22日, 大阪大学

- ② 桑原知子・大山康宏・畑中千紘, 心理臨床で何が起きているのか(2)―臨床家の意識と認知過程への着目, 日本心理臨床学会, 2010年9月5日, 東北大学
- ③ 長岡千賀・桑原知子・吉川左紀子・渡部幹, 心理面接における話者理解に関する実証的検討(5)―発話と沈黙の時間的構造を指標として―, 日本心理学会, 2009年8月28日, 立命館大学
- ④ 桑原知子・大山康宏・大橋真季, 心理療法で何が起きているのか―非言語行動と言語行動の実証的分析―, 日本心理臨床学会, 2009年9月22日, 東京国際フォーラム
- ⑤ 長岡千賀・小森政嗣, 心理臨床面接における対話者の身体動作(1)―カウンセラーとクライアントの身体動作の相互影響過程―, 日本認知科学会, 2008年9月7日, 同志社大学
- ⑥ 小森政嗣・長岡千賀, 心理臨床面接における対話者の身体動作(2)―再起定量化分析によるカウンセラーの身体動作の検討―, 日本認知科学会, 2008年9月7日, 同志社大学

[図書] (計2件)

- ① 桑原知子 日本評論社, カウンセリングで何が起きているのか 2010, 217頁
- ② 小森政嗣 音響情報の感性 日本認知心理学会監修, 三浦佳世編 現代の認知心理学 第1巻 知覚と感性, 北大路書房

[その他]

特になし。